

【最優秀賞】

ピッグステイル

大友 爽太郎（東京都 早稲田大学高等学院中部部 3年生）

かの有名な哲学者デカルトは彼の著書『情念論』において基本情念、他の感情を構成する為の基本的な感情の一つに「驚き」の感情を挙げたという。

人という生物は成長していく過程で様々なものを発見、学習していくことによって文明を築き、いつしか地球を支配していった。そうした点から見ると驚きというのは未知なる発見に対するリアクションであるため、自分たちが最も慣れ親しんだ感情だ。

よって俺は、この驚きという感情を大切にしていこうと日々心がけている訳だが、肝心の感情を大切にする方法というのが未だに分からない。誰か教えてくれ。

そして俺はまさに今、そんな驚きの感情と向き合っていた。

目が覚めたらそこは異世界だった。という神秘体験は、近年の青少年向けノベルの主人公に多く見られるケースだと聞く。

俺もできることならそんな体験してみたいが、現実是非情だ。俺が目覚めたのは飾り気のない黒一色のワンルーム。

俺は椅子に座らされており、手には一枚の黒い封筒を握りしめていた。当然、こんなものを手にした覚えはない。椅子から立ち上がろうとしたが、どうやら足錠が椅子と足首を繋ぎ止めているようで、身動きが取れそうにない。

手の方は自由だったため、他にどうしようもなかった俺は手元の封筒を確認してみる。

中から出てきたのは一枚のコピー用紙。タネや仕掛けの類は確認できなかったが、そこにはでかかとした文字で一文のみ、印刷されていた。

『イチノセハジメさんの能力は
空の小箱を出す 能力です』

読み終えた瞬間、背筋に寒気が走る。何だこれは。なぜこの紙には俺の本名が書かれている。そしてこの『能力』というのも謎だ。空の小箱？生憎だが、小物入れならもう間に合っている。

そして俺が文面から目を離れた瞬間、コピー用紙は突然燃え始め、あつという間に灰となっにかき消えてしまう。本当に今、俺の周りで何が起こっているのだろうか。そもそもここはどこだ？
突如、体がガクンと揺れる。

「！」

ジェットコースターに乗ると最初に聞く、あのガラガラガラという鈍いキョタピラの音が鳴っている。それに合わせて俺の視点はずれていつているのを考えると、どうやらこの椅子は真上に向かってどんどん伸びているようだ。

天井はいつの間にか、俺を通せるくらいの幅にばつくりと開いている。

椅子に拘束されたまま、俺は上の階へと上がっていく。

少しでも背を伸ばして上の階の様子を確認しようとした途端、

バラエティ番組で使われそうな安っぽい煙が噴射され、思わず咳き込んだ。

「——しい人？」

「——れで四人か」

煙の向こう側で、何やら声が聞こえる。俺の止まりそうになかった咳がひと段落ついた辺りで、煙も晴れてきた。

この階も、下と同じく黒一色のワンルームだった。ただ先程と違う点は、部屋の大きさが格段に大きくなったこと。そしてそのスペースを埋めるようにして設置された、中央の丸いテーブル。それを囲うようにして、俺を含め四人の人間が俺と同様、椅子に拘束されているようだった。

俺以外の人間、先にこの部屋に居合わせた三人も、俺と同じように目が覚めたらここにいたということなのだろうか。まあ足錠がかけてられている分、かなり近しい境遇と見ていいだろう。だが、問題はそこではない。

この場に居合わせた他の三人が、高校生であれば俺は納得しただろう。何故なら俺は高校生。ここへは高校生を集めたのだなどということが分かる。

が、俺以外の三人は皆、共通点など何一つ見受けられそうにない人達ばかりだった。

まず俺の右隣の椅子に座っているのは、純白のロリータファッションに身を包んだまだあどけない少女。ただ、異様な大きさのうさぎのぬいぐるみを抱いているのと、言い知れぬ威圧感を放っているのが妙だ。

俺の左隣に座っているのは、スーツをピシッと着こなした、如何にもデキる女といった感じのアラサーOL。そんな人は別に街中でもよく見かけるのだが、この人の問題はその胸だ。白の

Yシャツがはち切れんばかりに張っているのからしても、これはかなりの巨乳だ。こんな大きさは見たことがない。きつと職場でも大変なんだろうなあと余計な感想を抱きつつ、最後の一人、俺の向かいに座っている人を見る。

こちらは男で、それも結構年配。が、姿勢がしっかりしていて、服装の乱れも無くメガネが理知的で、清潔感あふれる中年男性といった風になっていた。

俺と目があうと、ニツコリと笑った。それに合わせるようにして、俺もそつと愛想笑いを返す。

「やあ。君もどうやら、我々と同じクチのようだね」

渋くダンディで、暖かみのある声色。ただその瞳は冷たくこちらを見据えていた。

「と、言うത്？」

「ちよつとお、とぼけてんじやないわよ。あー、あたしこういう人苦手だわー」

俺の左隣、アラサーと思われる女性が大きな声で俺を非難する。こちらは男と違って、敵意剥き出し。

「まあまあ、落ち着こつて。別に悪い人じゃ無さそうだし？」

反面、右隣の少女は最年少ながらも大人な対応をする。が、口元に薄ら笑いを浮かべているからなんとも言えない。

「私達は皆、気が付いたらここにいた。こうして既に拘束された状態だね。この二人は完全な他人で、ここで初めて知り合ったよ」
「……俺も同じです。後話しくいんで、できたら皆さんの名前を知りたいんですけど、もう自己紹介は済ませちゃいましたかねー」

俺の言葉に顔を見合わせる三人。どうやら、まだ互いの名前も知らないようだ。

「確かに、肝心なことを忘れていた。顔を合わせた以上名乗らない訳にはいかないね。私の名前は桐山浩也（きりやまこうや）。四十歳で、数学教師をやっている」

軽く一礼する桐山さん。

「あたしは的場陽子（まとばようこ）。ただのしがな会社勤めよ」腕を組み、フンと鼻を鳴らす的場さん。

「ボクはドライだよ、よろしくね！」

服装と同じく白のツインテールを揺らしながら笑うドライ。外国人だろうか。

「俺は一ノ瀬（いちのせ）はじめ。高校一年生です」

「ハジメっち、それ本当に本名？」

ケタケタと笑うドライ。名前でからかわれるのはいつものことだ。

「さて、全員の自己紹介は終わったが、なぜ私達はここに集められているのだろうか」

「そのギモン、ワタクシがお答え致しますよう！」

三人の誰でもない、ハリのあるバリトンボイスが部屋中に響き渡った。直後、中央のテーブルの上に、何者かが空間を歪ませるようにして現れた。

「うわっ、誰だよあんた！」

「おっと、驚かせてしまい失礼しました。ワタクシはこの部屋の管理人をさせてもらっています、テイパーと申します」

ピンクのシルクハットに同色の燕尾服、小洒落たステッキを構えたテイパーは顔を歪ませてニツと笑う。その鼻はゾウを思わせる形状で、口は異様に大きく、犬歯が綺麗に生え揃っている。サングラスで目は隠せているものの、完全に彼は人ではなかった。

「テイパーさん、貴方が我々をこの部屋に閉じ込めたのですか？」

「閉じ込めた、というのは誤解ですよキリヤマさん。ワタクシは皆さんをこの部屋に入れて差し上げたのです！」

手を大きく広げておどけるテイパー。左隣から露骨な舌打ちが聞こえてきた。

「ヒビツ、ご安心を。皆さんは今、向こうの世界ではぐっすりお休みになっていますから」

「……それは俺達が寝ている状態から、意識だけがここに飛んでいるってことですか」

「さあ、詳しいことはお教えできません。ただ、ここが『夢の世界』であるということだけお伝えしておきましょう！」

引きつったような笑い声をあげるテイパー。俺は試しに自分の頬をつねってみるが、普通に痛かった。どうやらこれは、単に夢として片付けることもできなさそうだ。

「しかし皆さん！ ワタクシとて皆さんをいつまでもここへ閉じ込めるといったことはしませんのでご安心を。すぐにお出しします。ただ一つ、皆さんの中でゲームをやっていただけね」

「ゲーム？」

「なにそれえ、面白そうじゃん！」

「ヒビツ、やっていただくのはこちらのトランプを使った『ぶたのしっぽ』と呼ばれるゲームです」

テイパーが取り出したのは、なんの変哲も無いトランプ。ふと目を離れた隙にテイパーは消え、テーブルには彼のトランプのみが残った。

「皆さんはぶたのしっぽのルール、ご存知ですか？ 一応ワタクシの方でも簡単に説明をさせていただきますが」

どこからともなくテイパーの声が聞こえ、トランプの山札がひ

とりでに浮き上がったと思うと、綺麗な円を描くようにしてカードが並べられる。

「簡単なゲームですよ。まず、こうして円状に並べられた場札の中から一枚を選択。表にして、円の中央に置きます」

山札改め場札の中から一枚が見えない手によって抜き取られ、表に返されるとテーブルの中心に置かれた。ハートの十。

「おや、ハートの十ですね！ ではこのカードを最初のカードとしますか。では次、的場さん。カードを一枚引いてください！」
「ええ、あたし？」

いきなり指名された的場さんは戸惑いつつも、すんなりと近くのカードを引き、置いた。柄は、ハートの三。

「ハートの三が出ただけど」

「おっと的場さん、かなり引き運が強いですね！ この場合、的場さんの引いたカードと場にあるカードのマークが同じハートなので、的場さんは場のカードを持ち札として引き取らねばなりません！」

「それっていいことなの？」

「ヒヒツ、良い展開と一概には言えませんね。このゲームでは順番にカードを引いていき、並べられた場札が零枚になった際に最も持ち札の少なかった人が勝ちとなります！ 持ち札を獲得すると、次の番より場札を引けなくなる代わりに持ち札からカードを出すことができますが、やはり無い方が気も楽でしょうねえ」

「何よそれ！ それじゃああたしは初っ端からハズレを引いたってこと？」

「ヒヒツ、まあ、まだ二枚ですし落ち着いていきましよう。あ、それと封筒の中身は見ましたか？ それに書かれていたのは、皆さんがこのゲームのみ特別に使用できる能力です。ゲームの中

で試していけばわかると思いますから、どんどん使っていましよう！」

封筒の能力。空の小箱がどうかというアレか。正直どう使う機会があるのかも疑問だが。

「そして最後に、皆さんのやる気を上げるために一言。このゲームで見事勝利した方一人のみ、ワタクシが『なんでも』願いを叶えて差し上げましよう！」

それっきり、テイパールの声はブツリと途切れた。途端、部屋は静寂に包み込まれる。

最初に動いたのはやはり桐山さんだった。

「では、時計回りで進めていこうか。次は私の番で構わないね？」
カードを無造作に引き、柄を見る。

「クローバーの六だ」

「ふふっ、じゃあ次はボクだね！」

ちらりとこちらを見るドライ。そして意味ありげな笑いを浮かべると一枚引いた。

「スペードのAだよ！」

あつという間に俺の番が回ってくる。ダイヤの五だった。番が回ってきた的場さんは持ち札の消費に成功。その後はクローバーの八、ダイヤの九、スペードの七と続き、再び的場さんはハートの持ち札を捨てる事ができた。

「そういえばさ、さっきテイパールの言っていたことなだけど」
唐突に的場さんが口を開く。

「なんでも願いを叶えるって言ってたじゃない？ あんた達って叶えたいことあんの？」

「……まあ、一概に無いとも言いませんが、彼が願いを叶えてくれるという保証も無いので、なんとも言えませんね」

「ボクはねえ、起きてみたいな」

「起きる？」

「うん、ボクはいつも眠いから」

「ふうん、不思議な子ね。あんたは？」

「そうですね。せっかくだし、素敵な出会いでもお願いします。勝てたらですけどね」

「そっかあ、一ノ瀬君まだ高校生だもんねー。若いっていいな」

話しているうちに番は俺に回っていた。クローバーの九にダイヤのK。俺はハートの二を引き当て、カード回収を免れる。その後もクローバーの三、スペードのQ、ハートのKと何事もなくゲームは進んでいった。

しかし、俺に三巡目が回ってきた時、唐突にそれは訪れる。

「——ハートの六」

「あっ！ ハジメっちハズレだあ！」

「的場さんに続いて二人目か」

これで俺は計十五枚の持ち札を獲得した。かなりの痛手だが、まだ逆転は可能だ。

「これでリセットね。はい、スペードのK」

的場さんが場にカードを叩きつける。と同時に、俺の体はグラツと傾いた。

「うぷっ」

「思わず口元を抑える。吐き気がした。見れば鳥肌が立ち、体が冷えきっている。」

他の三人を見るが、皆体調は良好のようだ。となると誰かが俺個人に向けて発動した「能力」とやらの可能性が高い。では発動したのは誰だ？ 能力の条件は？

必死に頭を捻るが、異様な頭痛と寒気が俺の思考活動を止めに

かかる。頭が割れそうだ。

そんな俺を他所にゲームは進行し、クローバーの七とダイヤのJが出されて俺の四巡目が来た。虚ろな思考でクローバーの六を出す。早くこの状況を脱しなければ、勝機は薄い。

スペードの四、クローバーの十、ダイヤのQ。俺の五巡目。適当に選んで出そうと思っていた俺の思考が、ある点でふと立ち止まる。

この能力は強力すぎるから、条件無しに発動できるというのは考えにくい。そして俺に対して発動したのは的場さんのターン。そこでの場さんが不審な動きをしていなかったのを考えると、やはり能力発動のトリガーとなったのはその前、俺の三巡目持ち札獲得の可能性が高い。となると。

「——スペードの、Aだ」

俺はカードを叩きつける。途端、全身に力がみなぎった。やはり読みは当たったようだ。

俺は右隣、少女ドライを睨む。ドライはそっぽを向いていたが、口元のニヤケは隠しきれていなかった。

「どーして分かったの？ ハジメっち」

横を向いたまま聞いてくるドライ。首をかしげる的場さんと、無表情の桐山さん。

「簡単なことだ。まず『カードに毒を仕込む』能力者の特定。これは的場さんと桐山さんを除いた消去法で君しかない。そしてカードは君の性格を考えて、最初に触れたカードだ」

「ふふっ、正確には毒じゃなくて呪いなんだけどね。でもなかなかやるじゃん！」

自分の能力がバレたにも関わらず、楽しげなドライ。しかし。
「一ノ瀬君。なぜ私が消去法で？」

「え、桐山さんの能力はもうバレーてるも同じようなもんですよ」
「……何だって?」

「引くカードはいつもクローバー。そして前の場さんがクローバーを引いた時だけ綺麗に別柄のカードを見事に引き当てる。これはもう、クローバーに愛されているとしか言いようがないでしょう」

「……少し、露骨すぎたみたいだね」

「ちょっとあんた達、何の話してるのよ?」

話についていけない場さんを置いて、悔しげとも取れる表情をする桐山さん。スペードのJ。的場さんは持ち札を獲得。

「チッ!」

「だが、私の能力がわかったところでどうする? 別に能力が使えなくなる訳ではない」

「それはどうでしょう」

「ちよっと、何だか体がおかしんだけど」

「すごいね! どんどん混ざってく!」

クローバーのQ。ダイヤの十。クローバーの八。スペードのJ。私にクローバーを引かせていき、場札を枯らすという訳か。本気だね」

「生憎、負けられない理由があるもので」

「残念ながら、それは私もだ」

「うぶっ、あたしも……」

「ふふっ、ボクもだよ!」

その後、勝負はすぐに終わった。

目が覚めた。光が眩しい。

「貴方! 夢子が目を覚ましたわ!」

母だ。この声を聞くのは何年振りだろう。

「この回復の早さなら、明日にでも退院は可能でしょう。それにして驚きだ」

「あの、白い髪の女の子、知りませんか?」

「白い髪の女の子?」

「はい。私の夢によく出てきて、一緒に話したりしたんですけど」

「うーん、聞いたことが無いなあ」

「……そうですか」

「夢子ちゃん! 夢子ちゃん!」

「陽子おばさん、苦しいから離してよっ」

「ダメ! もう離さないんだから!」

「的場さん、退院おめでとう。一年三組はいつでも君を待っているからね」

「ありがとうございます、桐山先生」

なぜだろう。入院前より体が軽くなった気がする。このままどこまでも飛んでいけそうだ。すっかり調子を取り戻した私は、胸いっぱい喜びを燃やしながら、土手を駆ける。

「病み上がりだろ。ちよっとは休めよ」

後ろから声が聞こえた。胸が熱くなる。

「皆、お前を待ってたんだぜ」

振り向くと、やはり彼だった。いつまで経っても変わらない、ゲーム好きの生意気少年。

「退院おめでとう。夢子」

「一ノ瀬君……！」
彼は不敵に笑う。ゲームで勝った時の、彼のいつもの癖だった。